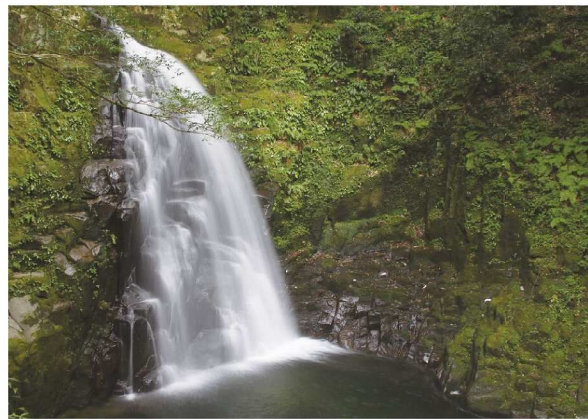


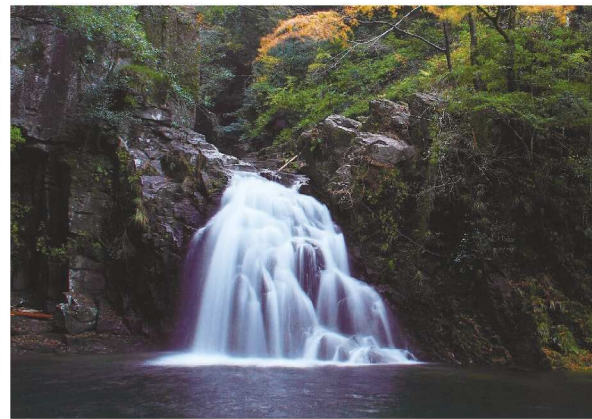
# 20. 室生赤目青山国定公園

室生赤目青山国定公園は、1970（昭和45）年に国定公園に指定されました。三重県と奈良県にまたがる約263km<sup>2</sup>の公園内には室生火山群という太古の火山が創り出した岩壁や溪谷が見られます。名張市内では、赤目四十八滝と香落溪の2つの地域が国定公園にふくまれています。

## 1. 赤目四十八滝



不動滝

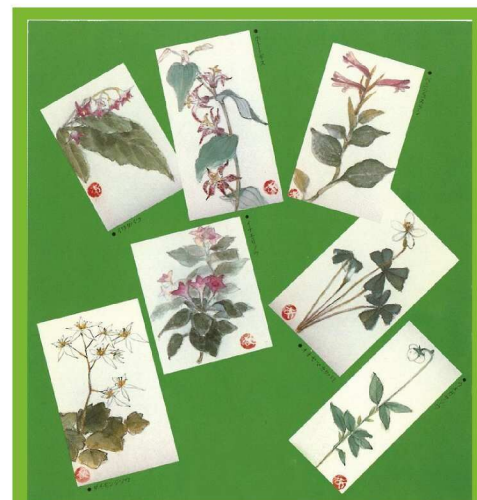


千手滝

### (1) 自然

赤目四十八滝には、岩石が柱のようになった「柱状節理」が見られます。これは、火山活動によって作られた「溶結凝灰岩」という岩石に規則的な割れ目が入ってできました。柱状節理のある岩のところに水が流れることによって階段状の地形が作られ、多くの滝が連なっているところもあります。このような地形は全国でも大変珍しいといわれています。四十八滝というのは滝が48本あるということではなく、数が多いことを表しています。主な滝として、不動滝、千手滝、布曳滝、荷担滝、琵琶滝などがあります。名前のある滝の数は23本です。

赤目四十八滝は、水がきれいなこと、さまざまな動物や植物が生息していることでも有名です。そのため、「日本の滝百選」「平成の名水百選」に選ばれています。また、珍しい動物としては、国の特別天然記念物である「オオサンショウウオ」が約300から400個体生息しています。「赤目七草」をはじめとする珍しい植物や貴重な植物も多くあり、植物の観察などにも絶好の場所です。



#### 赤目七草

- イナモリソウ
- ベニシュスラン
- ウメガサソウ
- ホトトギス
- イワタバコ
- ダイヤモンドソウ
- オオヤマカタバミ

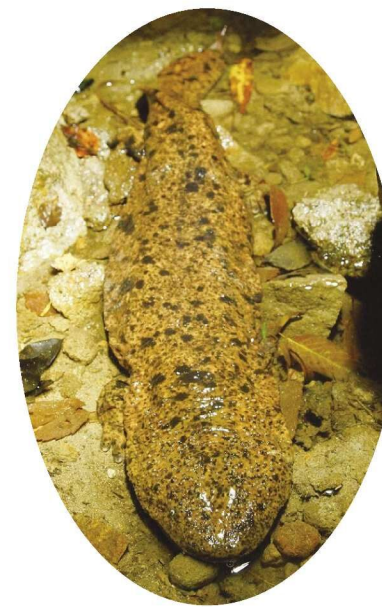


延寿院と枝垂れ桜

修行をしているところに「不動明王」という仏さまが、赤い目の牛に乗って出現したという伝説からきているといわれています。

平安時代には、「青黄竜寺」という大きな寺院が作られ、鎌倉時代には修行者が数百人いたといわれるくらい栄えていました。都から修行の地である赤目まで続くお参りのための道もつくられ、現在も滝道として残されています。また、今でも千手滝の近くの「護摩の窟」では、毎年3月に護摩行、火渡り行などの修験道の修行が行われています。

修験道と関係があるとされるのが「忍術」です。「忍術」とは、忍者が使う技術のことです。忍者という言葉は、現在では国際的にも有名になっています。外国の人は、忍者という存在に日本らしさを感じています。赤目四十八滝から西の山を一つ越えた「竜口」という地区には、戦国時代に活躍した百地三太夫の生家とされる屋敷があります。百地三太夫



オオサンショウウオ

は、伊賀流忍術を始めたとされ、赤目四十八滝を修行の場として忍者を育てたといわれています。赤目四十八滝の起伏に富んだ険しい地形は、忍者の修行の地としてふさわしいものだったのでしょう。

しかし、織田信長の伊賀攻め（天正伊賀の乱）により、赤目の寺院はすべて焼かれてしまいました。その後、江戸時代には現在も残る延寿院が再建されました。

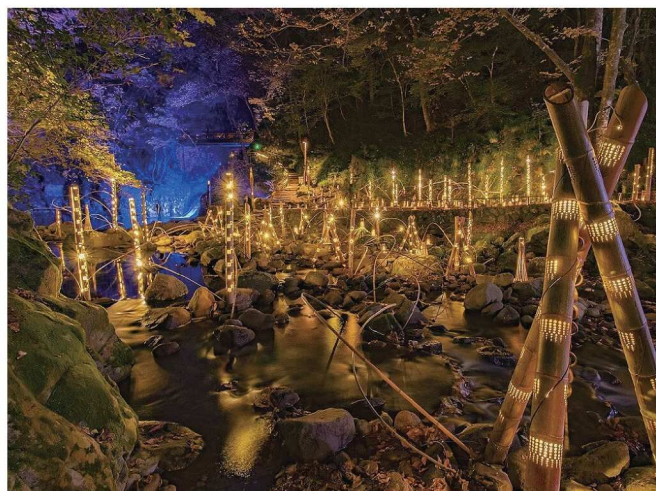
そして、明治時代からは滝の名所として知られるようになりまし。1930（昭和5）年に近鉄が開通し、赤目口駅ができると観光客が増加していきました。1966（昭和41）年には赤目四十八滝溪谷保勝会ができて、遊歩道などが整備され、観光地として発展し、観光客からの入山料で、環境保護や施設の整備が進められてきました。

### (2) 歴史

赤目四十八滝は、古くから「修験道」の修行の地として有名でした。修験道とは、山を神聖なものとする「山岳信仰」と仏教などが結びついた宗教のことです。奈良時代に修験道の祖とされる「役行者」が始めたといわれています。赤目の山も、役行者が修行の地として開いたという言い伝えがあります。また、「赤目」という名前も、役行者が

### (3) 赤目四十八滝を守る取り組み

赤目四十八滝には、年間15万人程度の観光客が訪れます。赤目四十八滝の美しい景観を守るためには、遊歩道や山の手入れや掃除などに多くの人の力が必要です。赤目四十八滝渓谷保勝会の人たちは、滝の環境と景観を守るさまざまな取り組みを続けています。



霊蛇広場のライトアップ

近年、「なばり竹あかりSDGsプロジェクト」の取り組みが注目を集め、竹あかりによるライトアップに多くの観光客が訪れています。

このプロジェクトは、地元の竹林整備により間ばつした竹を活用し、市民参加型のワークショップで竹あかりをつくり、これを赤目渓谷に設置してライトアップイベントを開催するというものです。イベントで得た収益を再び市内の竹林整備にあてたり、地域の活性化に役立てたりするなどして、一連の取り組みをけい続、発展させることを目指しています。

また、散策コースの中にあるトイレは、富士山にも設置されている環境に優しい循環式(排泄物を外に出さない方式)のトイレです。このようなトイレは、富士山に続いて日本で2番目に設置された最新式のものです。

## 2. 香落溪

赤目四十八滝から峠を一つ越えたところが香落溪です。名張川の支流・青蓮寺川に沿う香落溪は、まるで斧で断ち割ったような柱状節理の岩壁が、隣接する奈良県曾爾村までの約8kmに渡って続いています。中でも天狗柱岩や屏風岩などの岩壁のながめは素晴らしく、その雄大な光景と自然の造形美は、見る人を楽しませてくれます。

春はヤマブキやツツジがあざやかに咲き誇り、秋には全ての山が燃え立つような紅葉で香落溪が覆われます。目の前に広がる風景を楽しみながらのハイキングやドライブに最適な景勝地となっています。



香落溪



これからも赤目四十八滝や香落溪の自然を守るためには、どうしたらよいでしょうか。

ちょっと豆知識



自然の力は大きい  
自然災害から学び、備え、行動しよう

## 名張にもあった大地震

江戸時代の終わりごろの1854(嘉永7)年、今の伊賀市や名張市を中心に、「安政伊賀地震」とよばれるとても大きな地震がありました。伊賀地域全体で数百人から1000人ほどの人が亡くなり、5000軒余りの家が全てまたは半分以上倒れるなど大きな被害がありました。今の赤目町柏原に住んでいた伊三郎という人が、地震の様子を『大地震覚書』という古文書にくわしく書き残しています。



「と声をあげましたが、だれ一人も助けてくれる人はいません。年寄と子どもをなんとか抱きかかえ外へ逃げ出し、家族の無事を喜びましたが、ゆれは収まりません。女、子どもは泣くばかりです。つり鐘や太鼓、ほら貝のような音と地震の音とが一つになつて、天地もくずれ、どろ海になるのではないかと思ひ、神様や仏様をおがむばかりです。ほどなく夜は明け、音もやんできたので少し安心しましたが、道を見ただころ、所によつては六十cmも割れているのを見て、肝をつぶし恐ろしいこと限りありません。その日の午前八時ごろにまたまた、「どうどう」という音とともにゆれだし、石垣はくずれ、壁は落ち、田のあぜは欠けました。：

### 古文書 『大地震覚書』より

…六月十五日午前二時すぎに大砲や鉄砲のよ  
うな音とともに、大きくゆれだし、家がく  
けるのではないかと思ひました。夏のこと  
なので、蚊よけのあみである蚊帳の中で寝  
て、あわてていたので気を取り乱し、蚊帳に  
まかれて外には出られません。ゆれが厳しく  
なり、私も家族の者も「助けてくれ。助けて



『大地震覚書』

『大地震覚書』に書き残されたことを調べ、今、私たちが災害に備えてできることを考えてみましょう。

